

博士論文 概要書

川端康成の「魔界」に関する研究

—その生成を中心に—

A Study on the “Makai” of Kawabata Yasunari

— Focusing on the Formation —

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻日本研究・日本文化論

李 聖傑

序章 問題提起と本論の視座

半世紀に及ぶ川端康成の文学は、敗戦を境にちょうど半期に分かたれるが、変貌を遂げた後期の文学を特徴づけるのが「魔界」であると言われている。川端文学における「魔界」は、一般的には、親子二代にわたっての擬似近親相姦の愛欲の世界（『千羽鶴』など）、あるいは頹廢的な官能美に溺れる世界（『眠れる美女』など）としてとらえられている。このような世界では、汚辱やエロスに充ちた様相を呈しており、背徳と不倫の匂いが漂っている。しかし、川端の「魔界」の深層は決してこのような表層に留まるものではない。

本研究は、その実際を考察しようとしている。川端の「魔界」系譜の作品を主要テキストとし、彼の「魔界」思想の生じてくる経緯、特に戦争との関わりをつまびらかにし、「魔界」の包摂するものを考察している。川端康成はほかの文学者と違い、戦争に反対も賛成もしなかったともよく言われているが、この論文では旧満州紀行（1941年春、秋）、特攻隊基地の報道班員（1945年春）という戦争体験が、川端の戦後の精神風土に傷痕を残し、戦後作品の創作や死生観にも大きな影響を与えていることを考察している。また、戦後初の創作の「女の手」（『人間』1946年1月）から『みづうみ』（『新潮』1954年1月～12月）までの作品の読解を通して、「魔界」の胎動期、誕生、展開、爛熟期の諸相を考察した。

本論文の構成は、序章、4部（9章）、終章からなる。序章では、川端康成の研究史を辿る上で、問題の所在を見つけ出し、本論の視座を述べた。第一部（第1, 2, 3章）は「魔界」の源泉を探り、川端の「魔界」思想と彼の戦争体験および戦後の世相の受け取り方について考察した。第二部（第4, 5章）は、「魔界」の誕生の準備作とみられる「反橋」連作と、「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』を論じた。第三部（第6, 7章）は、川端の「魔界」思想の展開とみられる同時期に創作された作品『千羽鶴』と『山の音』について検証した。第四部（第8, 9章）は、「魔界」の爛熟期の作品といえる『みづうみ』について分析した。終章では、「魔界」の包摂するもの、およびその生成の経緯をまとめ、本研究テーマの展望として「魔界」の射程（近現代日本文学との関連）を述べた。

第一部 「魔界」の源泉について

川端康成における「魔界」思想を考察する前に考えなければならないことは、川端文学がどうして戦後になってから大きな変貌を遂げたのかということである。川端の「魔界」思想が戦争の実体験や敗戦および、戦争の延長線にある戦後の社会風俗とどのように関わっているのだろうか。第一部（第1, 2, 3章）では「魔界」の源泉を探り、川端の「魔界」思想と彼の戦争体験および戦後の世相の受け取り方について考察した。

第1章では、まず、1941年4月の『満州日日新聞』の記事、川端が発表した文章、そして、秀子夫人の『川端康成とともに』、秀子夫人や養女政子宛書簡などを合わせて、川端の旧満州紀行を考察した。次に、川端の特攻隊の体験を背景にした唯一の作品「生命の樹」、秀子夫人や養女政子宛書簡、同行した報道班員の新田潤と山岡莊八における特攻隊の記述、帰隊命令を受けた杉山幸照における川端の思い出の文章、大本営海軍報道部に勤

務する海軍主計大尉高戸顕隆における川端の思い出の文章などを合わせて、川端の特攻隊基地の報道班員の体験を考察した。「昨日の隊員は今日基隊から消え、今日の隊員は明日見られない」と「生命の樹」の中に書かれているように、太平洋戦争の末期の苛烈さをつぶさに見た川端は、特攻の「徒労」と「非人間性」を痛感している。戦時下の旧満州紀行と特攻隊基地の体験は、川端の戦後の精神風土に傷痕を残し、戦後作品の創作や死生観にも影響を与えている。戦争で破壊された「人間性」の回復は、戦後川端文学の重要なモチーフである「魔界」思想につながっている。

第2章では、まず、川端が敗戦と重なる相次ぐ友人の死去から受けた打撃を考察した。終戦前後に、川端は身近な文学上の知己の死に遭遇した。敗戦という現実に直面させられる契機として、身近な文学上の知友の死去も加えられ、さびしさ、孤絶感、老いの自覚が生じてきた。次に、川端における日本の伝統の美を継承しようとする日本（古典）回帰の決意の関わりを考察した。1920年代に新感覚派の一員だった川端は、文学の新しい傾向を追い、既存文壇の「伝統」を超越し、「実験」によって新しい文学の世界を再構築しようとしていた。西洋の写実主義から目を離し、東洋に目を向けようとするということについては、「末期の眼」の次の年に発表された「文学的自叙伝」に示されている。川端が自らのうちに日本の伝統的なものを意識しはじめたのは、第1次9巻本の『川端康成選集』が刊行されたころではないかと思われる。その第7巻の「日本文学の伝統」と「旅愁の日本」の2つの文章から、そのことはいかがえる。そして、『源氏物語』に対する変調を明らかに見せたのは「満州国の文学」の文章である。戦後になってから、「哀愁」や「私の考へ」などの文章を通して日本（古典）回帰を宣言したのである。最後に、終戦間近に生々しく特攻隊員の「徒労」の死を凝視した体験や、友人に次々と他界され、昭和初期に感得した「末期の眼」の認識が徹底するようになったことについて、1933年12月に発表された「末期の眼」の随筆を通して、竹久夢二、芥川龍之介、古賀春江の3人の芸術家の「末期」及び、芥川における「末期の眼」の認識と関東大震災の関わりを分析し、そこに見えてくる川端における「末期の眼」の認識とは何かを考察した。

第3章では、まず、占領軍の検閲による削除を受けた川端の3つの文章、「過去」、「結婚と道徳について：座談会」、「生命の樹」における削除された戦争と占領をめぐる言説と表現および、新聞連載の第29回目の1回分を占領軍の検閲への配慮によって書き直した「舞姫」の文章を通して、川端の眼に映る「戦後の世相なるもの、風俗なるもの」の実像、そしてGHQ/SCAPによる占領に対して、川端がいかなる認識を示しているかを分析した。次に、1948年11月12日、川端は読売新聞に委嘱されて、市ヶ谷の法廷にて東京裁判を傍聴した。その日はちょうど判決の日にあたっていた。その時の様子と感想は、「東京裁判の老人達」と「東京裁判判決の日」として発表されている。この2つの文章と判決を傍聴した日の日記を合わせて、川端にとっての日中戦争および東京裁判を考察した。最後に、日本ペンクラブの活動の一環としての原爆被災地の視察などを通して、川端にとっての「ヒロシマ・ナガサキ」を考察した。強いショックを受けた川端は、「起死回生」の思いをした。1950年4月、川端はペンクラブ会員たち23人とともに、再び広島を訪れた。長崎の原爆被災地へも足を伸ばした。川端は2回の原爆被災地の訪問を通して、戦争の悲惨さ、そして非人道的な壊滅の武器による無差別的な殺害をしみじみと感じていた。

後遺症や偏見に苦しみながら深い闇を生きている人々の姿を見ていた川端は、関東大震災のときよりもっと恐ろしい「生き地獄絵」を生々しく見ていたのではないか。「原子爆弾」という語が『舞姫』などの作品に出ているが、作家川端はこの言葉を作品に書き入れることよりも、人間のかけがえのない命の大切さが語られている数々の作品を通して、世界に対する平和を訴えようとしていたといえよう。

第二部 「魔界」の誕生について

川端は戦争の中で人間の命の儚さを実感してきた。個人としての「孤児の感覚」から分離して、人間全体としての「哀れさ」へと拡大したのである。しかし戦争の末期から「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』まではまだ一定の期間があり、「魔界」を孕んでいるこの時期を、彼の「魔界」思想の胎動期と規定する。川端の「魔界」思想がどのように顕現してきたか、「魔界」にはどんな要素が含まれているかは、それぞれの要素がどのように生成しているかということと関わっているので、第二部（第4、5章）では、「魔界」の誕生の準備作とみられる「反橋」連作と、「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』を論じた。

第4章では、まず、敗戦直後に発表された「女の手」を考察した。「女の手」は1946年1月号の『人間』に発表された。誌名「人間」の命名と、創刊された半年ぐらい前の鹿屋特攻隊基地の報道班員の体験、特に杉山幸照に語った「特攻の非人間性」との関わりを通して、戦後川端文学の出発点を考察した。次に、「再会」において戦後の世相がどのように表現されているかを考察した。富士子との出会いは祐三にとって自分自身との再会であり、また過去との再会でもある。「再会」という題名は、そのまま作品の主題である。それから、「反橋」三部作の読解を通して、「魔界」の構図がいかに具現化しているかを考察した。この3作品は、「あなたはどこにおいでなのでせうか」という問いかけの言葉で始まり、そして同じ言葉で終わっている。川端が語っている「あなた」とは何かを考察した。主人公の行平が「反橋」では実母を欠落したからこそ、母の記憶を復元しようとする「母なるもの」への憧憬といえよう。作品全体に漂っている哀愁は、敗戦と深くかかわっているので、母への呼びかけは大きな母としての「日本」に対する呼びかけといってもよいだろう。「末世の人」であると自覚する彼は、古典を読むこと、古美術を見ることによって、その生命を現在の生命に通わせようとしているようである。また、反橋は行平にとって何を意味するかを考察した。橋が構築されていると、両側の空間はつながっているが、一旦破壊されてしまうと、両側の空間は隔離されてしまうことから、ゆきあいとしての橋の機能が考えられる。作品では、行平が反橋を渡る前に、二人の母がいることを知らなかったため、養母と実母の境界がなかった。その境界が誕生したのは、反橋の頂でその真実が知らされた瞬間である。ゆきあいとしての「橋」は「魔界」の境界性に、そして橋の構築性（隣接）と破壊性（隔離）は「魔界」の両義性に通じるといえよう。最後に、「悪魔」や「魔よけ」などの言葉が散見される「反橋」連作における「魔界」を考察した。「反

橋」三部作においては、「魔界」の語は表れていないが、「悪魔」や「魔よけ」などの言葉が散見される。「反橋」三部作を通して、「魔」が煩惱であること、その救済を日本の古典に求めていることがわかる。この連作は川端の「魔界」系譜の作品の誕生の準備作といえよう。

第5章では、「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』の読解を通して、「魔界」が包摂するものとその特徴を考察した。まず、時代状況的側面について、戦争の影と戦後の世相を考察した。作家としての川端は社会の変化に目を配りながら、日本の敗戦から受けた悲しみとともに、戦後の世相や風俗を『舞姫』に書き入れている。次に、戦後の日本においては、「外側」の価値体系が動揺する中、他人の決めた価値観に合わせていけなくなる人が出てきた。この人たちは価値の尺度を自分の「内側」に求めるほかない。そこに、「外側」にある通俗的な価値観とのぶつかり、悩みが生じてくるのである。そのことを、『舞姫』の主人公の波子を通して考察した。それから、舞踊における「魔」について考察した。川端の初期の文章「遺産と魔」などを通して、舞踊の原点に「魔」が存在していると川端は若き日々から思っていたことがわかる。また、バレエを扱うことについて考えた。作者が書いているように、舞踊者の肉体が強調されるのも、天賦の肉体から発せられる踊りの力強さに生命力を感じさせる。だから、ニジンスキーや崔承喜もその優れた肉体の持ち主である。生命力の流動を表現するには単なる肉体だけでなく、肉体をその前提条件として、精神性がより重視されている。最後に、「魔界」の誕生と「魔」の様相を考察した。「魔界」という言葉の登場は、高男の友人の松坂と深く関わっていることを論じた。そして、『舞姫』における「魔界」には、3つの「魔」がある。時代状況としての「外魔」、煩惱としての「内魔」、芸術における「魔」である。「内魔」を抱える人間は、「外魔」の価値体系に置かれて、なかなか自己実現できない。自己実現を妨げるこの二つの「魔」の正体を認識しなければならない。認識した上でセンチメンタリズムを退けて、強い意志できびしく戦い、その煩惱を超越して、最終的に精神の迷いがなくなる境地に達する。これを経ることによって、生命力の根源を呼び起こして、究極的に「真・善・美」の芸術的な世界を目指す。

第三部 「魔界」の展開について

『千羽鶴』は、『山の音』とほとんど同時期に発表された、戦後川端文学の中で高い評価を得ている作品である。この二つの作品が雁行して書き継がれている間に、「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』が書かれたので、戦後川端文学の重要なモチーフとされる「魔界」を考察するにあたり、この二つの作品と「魔界」の生成との関係を考えることはきわめて重要な意味をもつだろう。第三部（第6、7章）では、川端文学の「魔界」の展開と見られる『千羽鶴』と『山の音』について考察した。

第6章では、視点人物の菊治の内面における「内魔」の生成とその深化を中心に考察し

た。まず、栗本ちか子の「あざ」と「不潔」を分析することによって、菊治における「内魔」の生成を考察した。「悪魔」の毒気をもつちか子の「あざ」によってもたらされた「不潔」は、菊治の心の底にある漠然とした「不安」と恐怖の原点にあたる。その恐怖や「不安」をもたらし「あざ」の呪詛から逃れるために、「不潔」の清めを志向する、「煩惱」としての「内魔」が生成してきたのである。次に、菊治と太田母娘の関わりを分析することによって、菊治における「内魔」の深化を考察した。夫人との契りの陶醉に溺れ、「不潔」の清めを求めている菊治は、父の女との不倫の悔恨と罪の意識に苛まれ、救済されるどころか、もとより心の底に抱いている「内魔」がかえって深まっていく。一方、夫人の自殺後、娘の文子の「魔性」に惹かれ、結ばれることになる。母と関係を持った男との交情に羞恥する文子が失踪してしまうことは、菊治に新たな罪意識を持たせる。つまり、「内魔」の内実は「煩惱」から「罪意識」へと深化していくのである。それから、救済としてのゆき子を考察した。正面に出てくる場面が少ないゆき子の存在は、具象的な肉体をそなえた人間としてよりは、千羽鶴の風呂敷の模様と結びついて菊治の記憶や幻想に浮かぶような、幻の女性の存在であるといえよう。続篇『波千鳥』では文子と入れ替わって、菊治の妻として菊治の側に暮らすようになる。しかし、『波千鳥』では手紙の中から文子が圧倒的な存在感を持つようになり、ゆき子が実在性の強い人物として描写されるのは、わずか「新家庭」と「波間一続千羽鶴」の2つの部分だけである。作品の最後まで、太田夫人と娘の文子との背徳と汚辱の思いが消えない菊治は、その「魔性」に呪縛されつつ、清潔のゆき子と肉体の交情をすることができない。最後に、茶室による異界の構築についても考察した。そこはあの世に去った過去の人思い出され、懐かしがられる場だけでなく、この世にいる男女の交情の空間でもある。ちか子は三谷家の茶室で、菊治の亡父の茶会の日という名目で、菊治とゆき子を結びつけようとするが、菊治はその茶室で太田夫人を抱き、さらに娘の文子と結ばれる。茶室はもともと何百年も伝承してきた茶碗の過去を思い、「一期一会」の現在を語るという茶を行う静寂な空間であるが、作品では、それを利用する人間の怨念、呪縛、嫉妬、罪業をすべて内包する、現実の倫理の規範を越える異界になっている。

第7章では、『山の音』に描出されている「魔」に繋がる要素、つまり戦争の影、戦後の世相、「夢」による異界の構築などを分析し、それらの関係を考察することによって、川端における「魔界」思想のこの作品における位相を考察した。まず、時代的側面として、『山の音』における戦争の影と戦後の世相を考察した。次に、内面的側面として山の鳴る音と信吾の老いの自覚、保子の姉の形代としての菊子、および信吾の抱える性の煩惱について考察した。身心の衰えを感じている信吾は、死に片足を踏み入れながら、憧れていた女性との性的なものを希求することによって生を求める。菊子に秘かな思いを寄せてはけ口の無い情念は、信吾の日常を支配しているが、その禁忌を犯すことが出来ない信吾は夢の世界に、菊子に対する秘かな恋情を託すことになる。そこから、「夢」による異界の構築を考察した。信吾の意識の底の状況が、夢という形象によって鮮明に提示されることと

なり、現実の思いが夢へと昇華し、更に夢から現実に戻る、つまり時空間を超越する「異界」が構築されているといえよう。この「異界」は、時空間の束縛から解放され、内心の欲望が素直に表され、そこには官能の匂いも充ちている。現実世界の倫理から解放されたいという欲望を持ちながら、最終的に現実の菊子への禁忌の愛を自覚し、あの世にいる保子の姉に永遠の精神的な救済を求めることになったといえよう。最後に、『山の音』における「魔界」を考察した。地鳴りのような深い底力をもった山の音を死期の告知と聞き、恐怖を覚える信吾にとって、山を鳴らす「魔」は死期の告知のシンボルであり、死に対する不安でもある。その不安の深層には老いに対する煩惱がある。「山の音」は過去と現実、あるいは夢とうつつ、さらに生と死の境に聞こえてくる音である。死に対する恐怖と性に対する不安の音であり、逆に言えば生に対する希求の音とも言えるであろう。したがって、信吾が生きている現実も夢の続きのようである。現実世界では倫理の規範でできないことが「夢」の中で解放され、その世界では何をしても許されるという信吾の深層意識の「異界」が構築されている。

第四部 「魔界」の爛熟について

『舞姫』では、「魔界」は人間の世界のことと提起され、『千羽鶴』や『山の音』では、「魔界」の展開が見られるが、川端の「魔界」を最も端的に表している作品は、「魔性」、「魔力」、「魔族」、「魔界の住人」、「魔もの」、「悪魔」といった言葉が最も頻出する『みづうみ』と言えるだろう。第四部（第8, 9章）では、「魔界」の爛熟期の作品といえる『みづうみ』について考察した。

第8章では、『みづうみ』の主人公の桃井銀平を視座として、川端の「魔界」思想と戦争の関わりを考察した。まず、「みづうみ」の雑誌初出から単行本へと、多くの異同があり、大幅な加筆訂正がなされ、第11回の後半と第12回の全文が切り捨てられた、その削除の意味を考察した。単行本の結末では、銀平は長靴を履いた女の身に自分の影を見出して、自分の分身のような存在であることを悟ったのであろう。それを見ることによって、自己像を映し出す鏡のような存在の女の中に銀平は自分の現在までのあり方を見つめなおすことができたのであろう。美女の後をつける銀平が、結局醜い女に後をつけられる宿命に帰している。ここで作品が終わることで、物語の流れがぴたりと止まり、読者にその宿命を喚起させる。銀平は生まれつきのコンプレックスを解消するために、美を追跡し、魔界に救済を求めることに執着し、結局自己喪失になった。こうした執拗さは人間の本性の弱さにあるもので、川端はこういう点を銀平の身に集中し、且つ拡大して、赤裸々に読者に提示している。次に、生い立ち、初恋、学生生活、美への追求という4つの方面から、「銀平＝川端分身」説を分析した。そして、『みづうみ』における銀平の「魔性」を考察した。少年時にコンプレックスである足の醜さ、とくに根本的な血筋を指摘されたときの銀平の異常な行動は銀平の後の魔性の源といえよう。そして、『みづうみ』における戦争の影を分析した。『山の音』に出てくる赤ん坊の象徴性と同じように、『みづうみ』の中

でも、戦争は赤ん坊の幻のように、銀平の戦後の精神風土に容易に消しえぬ痕跡を残し、戦時の緊張感から日常性への移行の中で、美女を追求し続けるような魔的な世界を形作っているといえるだろう。戦争に生き残った銀平は、友人などの戦死を見て、戦後の日常性への移行の激しい落差に適応できず、異常な心理の紋様が織り成されてきたのだろう。また、『みづうみ』における「敗戦」と「戦後」については、戦後の不安と混乱による犯罪の増加、終戦直後の上野駅の実態、作品に登場する未亡人や「半未亡人」、闇市と焼け跡などを通して描かれていることも明らかにした。

第9章では、まず銀平の欲望の対象である4人の女性を中心に分析した。みづからのうちに魔性を持ち、男につけられることでその魔性が目覚め、男に应えてしまうような女性(久子と宮子)と、清純なイメージが強く、銀平にとっては救済としての存在の女性(町枝と湯女)である。4人の女性像の考察を通せば、『みづうみ』における「魔界」は次のような特徴があげられる。まず、主人公銀平が追跡するときには、かならず自己を喪失する状態にあるという点である。次に、銀平は久子、宮子、町枝、湯女に母性を求めているという点である。正確に言うと、従姉のやよいにも母性を求めている。この母性はいつも故郷の「みづうみ」として象徴されている。銀平の故郷回帰の願望は、実は母体回帰ということの意味するが、故郷は銀平にとっては「みにくい足」を生み出した場所であり、父の変死した場所でもある。一方、故郷は美しい母の象徴でもある。「醜が美にあくがれて哀泣する」、そして「みづうみ」に対する怨恨と渴望の感情、という背反する両面を共存させようとする銀平の心象は、「魔界」のメカニズムを如実に表しているのではないか。また、美しいものを追跡する「衝動」を抱えている主人公銀平と関わっている女性に焦点を合わせて論じ、「後を付ける」という「魔」的行動、「天の摂理」としての美女追跡、そして「血」の呪縛などを分析することによって、銀平の魔性の原点について考察した。銀平の内心に抱えている孤独感は「猿みたいな」醜い足に象徴されている。醜い足があるゆえに、自分は尋常の世間から隔てられたと思っている銀平は、美しい女性にその癒しを求め、さまよい歩くのである。「醜悪な足が美女を追ふのは、天の摂理だらうか」という心境を述べている銀平は、救済を求めるために、積極的に美女を追い求めている。しかし、銀平の足の醜さは根本的には父の醜さという「血」によるものである。「みにくい足」はその「血」の醜さの表象であり、そこに自己存在としての「劣等感」という根源的なものがある。このように、銀平の魔性の原点である生まれつきの「血」が徐々に変容してきて、敗戦後の苦悩と悲しみが久子の魔力に触発されて、魔的な「あとをつける」行動をはじめたのであろう。最後に、『みづうみ』における「魔界」とは何かを考察した。川端は自らの分身とされる銀平と同じように、若い時には純粹さが自身を領していたが、敗戦をきっかけに作風を一転させ、戦後の魔界系譜の作品を創作した。その魔性も川端の体の衰えに伴って大きくなり、最後は川端の心身に浸透したのであろう。

終章 「魔界」の内包するもの

以上のように、川端の「魔界」の生成を考察してきた。川端文学には美があって、モラルがないとよく言われるが、それは川端文学の「魔界」に対する誤解である。モラルがないというのは、既成の道德規範に則していないことを意味する。確かに、川端文学における「魔界」は、一般的には、親子二代にわたっての擬似近親相姦の愛欲の世界（『千羽鶴』など）、あるいは頹廢的な官能美に溺れる世界（『眠れる美女』など）として捉えられている。このような世界では、汚辱やエロスに充ちた様相を呈しており、背徳と不倫の匂いが漂っている。しかし、川端の「魔界」の深層は決してこのような表層に留まるものではない。

すでに序章で指摘したように、「美しい日本の私」のなかで語られている一休の「仏界易入魔界難入」という言葉に川端はかねてから「惹かれ」ている。仏教の真を喝破しているかのようなこの言葉を念頭に置きながら、戦後の「魔界」系譜の作品が創作されたのではないかと思われる。筆者はここで川端康成を仏教徒や仏教学者として論じようとしているわけではない。しかし、「私は東方の古典、とりわけ仏典を、世界最大の文学と信じてゐる」と若き日の川端自身が「文学的自叙伝」のなかで述べていたように、彼は仏教に非常に親しみを感じており、仏典に傾倒していたことが明らかである。川端文学は仏教から大きな影響を受けていることも異論がなかろう。川端は仏教（あるいは禅宗）の精神に深く呼応し、仏典の教え（あるいは一休の言葉）を自己流に解釈して作品の中に展開しているのである。川端文学の「魔界」は、まさしくこのように作られてきたのである。一休が「宗教の形骸に反逆した」と同じように、戦後川端文学における「魔界」は、既成の道德やモラルに反逆し、その中に「人間の実存」、「生命の本然の復活、確立」を目指す世界である。それは、作家としての川端が到達したひとつの芸術の境地といえよう。

「魔界」という言葉がはじめて出てくるのは、『舞姫』の「第七章」の表題「仏界と魔界」である。そこで登場人物たち（矢木と品子）の会話のなかで解釈されようとしているが、用いられている意味合いはまだ不明瞭である。しかし、主人公の波子の内面の性と愛の葛藤がつぶさに描かれている。川端は『舞姫』を通して、人間の抱えている煩惱が隠されるべきものではないと伝えたいのではないかと考えられる。これが、川端の「魔界」を解くもっとも中心的なキーワードである。川端において、人間の心の闇や抱えている悪は隠されるべきものではない。徹底的に人間の心の闇や悪や欲望をみつめ、徹底的にその煩惱をつきつめる。こうした徹底のなかに救いがおのずから生まれてくるのである。たとえば、竹原と愛人関係が続けている波子は、夫を裏切るという不貞に悩み、常に「憎悪」「悔恨」「絶望」という感情を抱いている。その煩惱を徹底的に見つめた後、愛の正体を見極めることができ、「もう、こはいつて、言ひませんわ」と宣言したのである。

世間倫理の観点からみると、波子はたしかに不倫をしている。しかし、『舞姫』は勸善懲惡を説く物語ではない。川端文学の「魔界」の価値は、道德を説教することにあるのではなく、人間の煩惱と、それが生み出す苦悩の深さを語る、というところにある。『千羽鶴』と『山の音』に進むと、こうした「魔界」の意味合いが明確になってくる。同じ頃並

行して発表されたこの2つの作品では、「魔界」なる言葉が直接出ていないが、倫理的抑制が崩れはじめ、まさに「魔界」そのものが描かれているといえよう。『舞姫』では不倫が描かれているが、『千羽鶴』と『山の音』では一般的な意味での不倫をはるかに超えた、いわば近親相姦的な世界が描かれている。『山の音』では若い嫁（菊子）にたいする舅（信吾）の秘かな愛をえがく。美しいものは手近にあるがそれを手に入れることは、倫理の破棄を意味するものである。『山の音』の叙情は、このような美意識が、倫理的抑制の前で立ち止まっているところに成立するが、『千羽鶴』ではそのような抑制が崩れ、菊治と亡き父の愛人（大田夫人）およびその娘（文子）との二重の擬似近親相姦の図が呈されている。つまり、この両作品が川端文学の「魔界」の分水嶺といってもよからう。『山の音』は、美が道德の限界のもとにあった作品であるのに対し、『千羽鶴』は、道德的抑制が崩れ、深層意識に秘められた欲望の世界が無限にふくらんでいった作品である。

こうした倫理の枠をふみやぶり、欲望を解き放った放埒な世界が描かれている『千羽鶴』の水脈を継承し、女性美のあくなき追求のあまり「魔界の住人」となる人物を主人公とした『みづうみ』が発表された。『みづうみ』になると、美意識が完全に倫理性を踏み倒している。銀平には、美しい亡き母の面影を追い求める気持ちと、猿のような「みにくい足」によってもたらされている劣等感ゆえに、「肉体の一部の醜が美にあくがれて哀泣する」気持ちがあり、この二つの要素が相まって、美しい女に出会うと、衝動的に内から駆り立てられるようにして、その女の後をつけていくのである。彼の中には、もはや世の中の道德や倫理といったものへの配慮がみられない。

要約してみると、『舞姫』では、「魔界」の意味合いがまだ不明瞭なので、「魔界の住人」が登場していない。『山の音』では、信吾の「どんな姦淫よりも、これは醜悪だ。老醜といふものだらうか」という、自製の気持ちによって「魔界」の入り口に立ち止まり、「魔界の住人」になれなかったのである。『千羽鶴』の菊治と『みづうみ』の銀平は、信吾のような自制や抑制の気持ちが起らなかったため、「魔界の住人」となっていると見えよう。詳しいことは、それぞれの作品論に考察したので、繰り返さないが、こうして戦後の川端は「魔界」に惹かれるままに『舞姫』を書き、『千羽鶴』と『山の音』をしあげ、『みづうみ』を発表したのである。つまり、川端は『舞姫』と『山の音』では、まだ一種の道德的な抑制を働かせており、「魔界」的なものからの脱却を試みていたが、『千羽鶴』では、その道德的反省をだんだん落としてゆき、『みづうみ』になると、水虫が執念深く蔓延するように、魔的なものが彼のなかに日増しに広がっており、「魔界」的なものからの脱却を諦めて、まさに「魔界」のなかにひたり続けている。

さて、本論文の第一部から第四部までの考察を通せば、川端における「魔界」はどのような要素によって構築されているかが明らかである。戦争を契機にして川端文学は変わってくる。特攻隊基地の体験による「末期の眼」の認識の徹底化、敗戦による悲しみ、友人の死去による残生の自覚、『源氏物語』への親炙による孤児の意識の深化、占領による無力さと喪失感、失われた「日本」へのノスタルジアなどの「魔界」の生成を促したものは、戦争の影・戦後の世相としての「外魔」、不安・煩悩としての「内魔」、という2つの要

素として集約できる（『舞姫』のみ3つの「魔」の要素がある）。

1つ目の「外魔」については、第9章で述べたように、「外魔」は「身心」以外のものをさしている。厳密にいうと、「外魔」の内容は時代状況のほかにもいろいろあると考えられる。しかし、「魔界」の胎動期の作品である「反橋」三部作、「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』、「魔界」の展開として見られる『千羽鶴』と『山の音』、「魔界」の爛熟期の『みづうみ』などの作品を分析してきたように、時代状況的側面が「外魔」の諸要素の中で最も大きな存在にあたっているといえよう。作品の主人公たちであろうと、作者川端の体験であろうと、敗戦による打撃、占領から受けた無力感と喪失感などは、彼らの戦後の生き方の大きな障壁となっていたのは見てきたとおりである。

2つ目の「内魔」については、人間の心に抱えている闇のようなものである。「内魔」はよく不安や恐怖という表象で現れている。その内実は、「反橋」三部作では行平の出生に対する煩悩として提示されている。その後、この煩悩はそれぞれの作品で具現化し、『舞姫』では波子の性と愛の煩悩、『千羽鶴』では菊治の「不潔」を清めたいという煩悩、『山の音』では信吾の性と生の煩悩、『みづうみ』では銀平の欲望と宿命の煩悩となっていることは考察したとおりである。こうした煩悩を抱えている主人公たちは、常に罪悪感や劣等意識、「かなしみ」、「自己嫌悪」、「喪失感」などの感情を抱いていることも明らかにした。

「内魔」を抱える人間は、「外魔」の価値体系に置かれて、なかなか自己実現できない。自己実現を妨げるこの2つの「魔」の正体を認識しなければならない。認識してからセンチメンタリズムを退けて、強い意志できびしく戦い、その煩悩を超越して、最終的に精神の迷いがなくなる境地に達する。これを経ることによって、生命力の根源を呼び起こして、究極的に「真・善・美」の芸術的な世界を目指す。その世界では、善と悪、罪と福、穢れと浄め、道徳と背徳などの基準が世俗的な価値観に拘束されなくなり、人間の本性に戻ることができる。大きく言えば、「仏界」と「魔界」の関係もそのようであり、何をもって「仏界」と定義し、また、何をもって「魔界」と定義するかは、それを捉える主体によるだろう。序章で述べたように、川端文学における「魔界」の語が初めて登場する『舞姫』によると、「魔界」という言葉はもともと一休禅師の「仏界入り易く、魔界入り難し」に由来する。それゆえ、従来、「仏界」に相對する概念として「魔界」が考察されてきている。

しかし、「仏界」と「魔界」は果たして二つの対立する事項であろうか。一休の狂雲集の356番には「仏魔隔一紙」という言葉があり、中国語では「仏魔一如」という言葉もあるように、「魔界」と「仏界」の関係について、メビウスの帯の構造が見られる。「仏界」と「魔界」が二つに分けられても、両者の存在は相互に依存し合っている。「魔界」と「仏界」はそれぞれ別の世界として描かれているが、その本質は「一」であるかもしれない「而二不二」の関係と見ることもできる。つまり、仏界と魔界とは一つのもの両面であって、決して二つの対立する事項ではない。それはメビウスの帯のようにねじれながらつながっており、「魔界」に墮ちていくように見えるが、最後は「仏界」に到達することができる。換言すれば、「魔界」に墮ちていかないと、「魔」の実態を把握できないのである。「魔」

の性質を会得してから、魔を降伏する意識が上昇し、真の救済の境地に至ることになる。戦後川端文学における魔界とは、現実世界から隔絶された時空間を志向するものであり、世俗的な価値観の束縛から解き放たれ、人間の本来の姿に戻り、生命の根源・精神的な救済を究極的に求める世界とも通じる。

ここでの救済については、序章で「又向魔如何降」を指摘したように、「外魔」と「内魔」に向かい「如何」に「降」すということは、「仏界入り易く魔界入り難し」という言葉を解く鍵である。川端の「魔界」系譜の作品のいずれにも、救済としてのものが存在している。具体的にみると、「反橋」三部作で語られている日本の古典や古美術、『舞姫』での舞踊や仏像、『千羽鶴』でのゆき子、『山の音』での保子の姉、『みづうみ』での町枝は救済の役割を果たしていることを明らかにした。つまり、2つの「魔」に相対して救済としてのものが存在するのである。しかし、「魔界の住人」が登場している『千羽鶴』と『みづうみ』では、救いにあたる人物に無力さがある。美しい女の肉体を求めることによって最終的に救済されるということは不可能であろう。美への耽溺のすえ、救われないままにやがては滅びの予想される世界を描く作者川端の真意は、何であろうか。「魔界」に託した川端の意図は、人間の心に底知れぬ闇や悪や欲望があること、その煩悩の姿をありのままに描き、人間の行動や感情をありのままに語る、というところにあるといえよう。つまり、川端の「魔界」観の根底に、人間を煩悩の相にみる思想があるのである。救われるかどうかは、こうした「魔界」を徹底的に熟視することができるかどうかによる。だから、「魔界入り難し」というのである。それは、芸術家の必然の厳烈な運命として川端のなかに受け止められているといえよう。以上が本研究の結論である。